

文化交流研究会発足の時期を振り返って

増田哲子

私は現代文化・公共政策専攻の2期生で、修士課程に入った当時（2002年）、1期と2期の学生は合わせて10人もいなかったと記憶しています。でも、よく夜中まで院生研究室の皆で話をしたり、先生方と授業外で接する機会も多く、人社棟の7階は活気がありました。

最初の院生研究室は、人社棟7階のエレベーターを出てすぐの小さな一室でした。その部屋で、私たちは夜遅くまで何かを読んだり、書いたり、コーヒーを飲んだり、カップ麺を食べたりしていました。窓の外は真っ暗で、それとは対照的に部屋の蛍光灯は明るく、自分も含めて数人がノートパソコンに向かっていく情景が思い浮かびます。思い出すのが冬の夜の研究室なのは、修士論文の締め切りの時期の体験のためでしょう。論文が完成するのか不安も大きかったけれど、今から振り返ると、決して孤独な作業ではありませんでした。

修士論文の構想発表会もよく覚えています。学生数は少なかったものの、分野の先生方ほぼ全員が揃っている前で発表を行いました。まだ構想とは呼べない、曖昧なアイディアのようなものに対して、先生方は様々な方向からコメントをしてくださいました。発表会は、しばしば予定時間を超過して行われましたが、そのことは、当時できたばかりの分野全体が持っていた、研究や教育に対する熱量の大きさを示していたのだと思います。

文化交流研究会の立ち上げも、そのような専攻の創成期に行われました。具体的な準備作業の前に、学生たちで集まり、話し合いをした記憶があります。第1回の総会では、研究会の規約や活動内容、会誌の発刊等について議論を行い、会員の方の承認を得たはずですが、ただ、当日、私は進行役を務めたために非常に緊張しており、ほとんど記憶がありません。その後、正式に会が発足してからは、1ヶ月から2ヶ月に一度というハイペースで研究会が行われ、先生が発表をしてくださった回もありました。この時期、研究会の他にも学生たちが勉強会を開いたり、留学の情報をやり取りしたりと、活発な交流がありました。私にとっては非常にありがたく、楽しい時間でした。また、先生方との距離が近く、研究者としての日々の姿を間近で見れたことが何よりも貴重な経験でした。自分自身が教員となった今、当時の先生方の真摯な姿勢をイメージし、少しでもそれに近付きたいと思いながら毎日をごしています。